
オレ達のソフトテニス部

トワイライト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オレ達のソフトテニス部

【Nコード】

N2312B

【作者名】

トワイライト

【あらすじ】

ソフトテニスを誰よりも好きで巧くなりたい『渚刹那』とその仲間たちの物語。

第一話 中学生最後のサーブ（前書き）

えー、はじめまして、トワイライトです。僕はソフトテニスが好きなのでこの様な小説を書きました。一応、現実味のある小説にしたいと思っっているのでよろしく願います。

ギャグもいれるつもりなので、楽しんでください！

第一話 中学生最後のサーブ

時は六月、中学校のテニスコートで試合があっている。
ソフトテニスの試合だ。

ここで、ソフトテニスの説明をしておこう。まず、テニスには硬式と軟式がある。硬式は、ツイストサーブやスネイクを打っている少年達がやっているテニスだ。主に硬いボールを使っている。そして軟式はあまり知られていない。軟らかいボールを使っているテニスなのだが硬式と違い、一人ではなく二人で試合をする。硬式と比べてスピードは劣るが、技術で勝るとも劣らないテニスだ。ここで大まかな説明を終わるが、細かいルールはのちほど。

試合は最後の試合だか決勝ではなく、三位決定戦である。

審判は

「アドバンテージレシーバー！」

とコールをすると、ユニホームの背中に『暁中 渚』と書いてある少年がサーブを打った。ボールを空に向かって投げて、ラケットをふりおろす。上サーブであった。スピードはなかったが、サービスエリアには入った。

そのボールを相手が打ち返してきた。強くではなく、ネットギリギリに落とすドロップショットである。

『渚』という少年は

「またか…」

と思いながら取りにいった。とどいたのだがネットに引っ掛かり、審判が

「ネット、ゲームオーバーゲームセット！」

とコールして試合は終了した。

勝った方のペアは喜んでいた。なんせ次の大会に進めるのだから。

しかし『渚』少年のペアは悔しがつていた。次の大会に進めないのと、最後の試合だったので。泣いていた。
そして、その誰よりも泣いていた少年『渚』こそ、この物語の主人公である。

第一話 中学生最後のサーブ（後書き）

次は、試合の終わった後と、高校受験の物語になると思います。ソ
フトテニスのコトもちゃんといれるつもりなので。

第二話 男じゃねえその後と敗因

「渚、涙を拭け。表彰式だ。良かったじゃないか。最後に賞状貰えて。」

顧問が渚に言った。すると泣きやんだペアも、

「刹那、オレ達賞状もらえるんだぜ。いつも一回戦で負けていたオレらが。それにさっきの試合はアレだからな。」

そう、さっきの試合の相手は渚が最も嫌いな戦法ばかり使ってきたのである。その戦法とは『ドロップショット戦法』である。

『ドロップショット』とは第一話で書いたようにネットギリギリにボールを落とすショットである。

この戦法を嫌うワケは、渚の目には勝負を逃げている様に見えるからだ。だが決して卑怯な戦法ではないが、渚には卑怯な戦法として見えるのだ。

「そうだな、アイツらは男じゃねえな。逃げてばっかで。オレとラリー（打ち合い）しろってんだ！」

渚は自分で自分を慰めた。ペアも

「アイツらは非常に非情なのさ」と言った。

「ダジャレ言ってる場合か！」

そこでやっと渚の顔にも笑顔が戻った。

表彰式で渚はこの戦法を使うペアの一人と目があつた。完全に見下していた。渚は怒りを抑えていた。ペアも渚の状態がわかつたらし

く、渚を落ち着かせていた。渚はペアの名前を心に刻んだ。『西村了』『尾沢要』と。

「結局地区大会で負けたじゃねーか。」

「引退パーテイ何時？」

「あゝ長かった。やっとゆつくり出来るぜ。」

などと仲間が口々いつている。

テメーらは悔しくないのか？あと少しで次の大会に進めたのに。

「負けて良かったな、オレ達はどーせ出れないし。受験勉強しなくちやいけねーからな。」

「！……！」

渚はショックを受けた。こんなにコイツらはやる気がなかったのか。じゃ何のために部活に入っていたんだよ。

「刹那、もうオレ達の夏は終わったんだ。」

「なに言ってる……」

「さあ砂を持って帰ろう！袋はここにあるぞ！」「バカ」

第三話 ヤッパリな不安と嫌な予感（前書き）

なんかソフトテニスと離れて行ってます。 アセアセ

でも読んでください。

第三話 ヤッパリな不安と嫌な予感

そして夜、近くの焼肉屋で打ち上げが行われた。
顧問の

「カンパ―イ！」

と言うと仲間が一齐に肉を食べ始めた。

「あ！オレが食う肉とんな！」

「バーカ！速いもん勝ちなんだよ」

「先生！肉が足りませ〜ん」

こんな感じで時間が過ぎていった。渚も食べまくっていた。あらかた終わったころ、渚はふとみんなに聞いてみた。

「なあ、高校でもソフトテニスやる？」

「家まで帰るのが打ち上げなんだからな！それでは解散！」
全員家に帰って行く。じゃオレも帰るか。

漆黒の闇のなか渚は一人で帰っている。

クソ！ヤッパリオレだけしか続けないのか。聞いただけ無駄だったな。なにが

「キツイからやんない」

だ。どこの部活だってキツイだろ！

「遊びたい」

とか

「勉強したい」

とか

「彼女を作って遊ぶ」

とかどーせしないだろ！だからウチは弱かったんだ。

やる気がないしプライドもない、目標もない。弱くて当たり前だな！

渚はこう思いながらも寂しさを感じた。

結局、暁中学校出身のソフトテニスプレイヤーはオレ一人。大丈夫かな？落ちこぼれになったらどうしよう。

渚は家に着いて寝るまでこの事を考えていた。

次の日からオレはただ勉強するためだけに学校に行っている。部活がない日々がずっと続き、イライラしている。一応オレも受験生なので志望校に進学するために勉強しなければいけないのだが、推薦でいけるので特にすることはない。（それでもオレは頭はいいのだ）でも周りの人が勉強してるので、オレも勉強^{フリ}している。この様な日々がずっと続いた。あの日までな…………。

オレの推薦合格が決まり、勉強^{フリ}をしなくてよくなったので、今日から3キロ走ることにした。高校生になるまで後一ヶ月弱。少しでもトレーニングしなきゃな。

無事学校が終わり家にさっさと帰ろうとしたときだった。

「刹那くん。私達に勉強教えてよ」

げ、マジヤツに見つかった。

渚の目の先には、まるで、クローン人間の様に似ている女の子が二人いた。

「同じ高校にいくんだから勉強教えてよ」

「お前は行くって決まってるんだろ！」

「私だけじゃ無いもん。瞳だって決まってるじゃないもん。ね！」

「うん」

『瞳』と呼ばれた少女が小さくうなずきながら答えた。

「と言うわけで、哀歌こと私と瞳の姉妹に勉強教えてね！」

ここまで不幸か、オレの人生。過去に戻るなら、推薦入試の日に戻って仮病使って休んで、不合格になりたいぜ。

第三話 ヤッパリな不安と嫌な予感（後書き）

題名の意味はまだまだ先のことです。

次は双子の姉妹の受験勉強と高校入学です。

第四話 〽入試と入学と新たな問題〽（前書き）

やっと高校に入学しました。これからやっとソフトテニス部のコトを書けそうです。

第四話　く入試と入学と新たな問題く

哀歌がわめく。

「何が！『草食動物の目はどのようなか』についているか答えなさい。また、その理由を答えなさい。』よ。知るわけないでしょ。なんとなくでしょ！」

瞳が小さい声でいった。

「その問題、入試によくでるよ。これぐらいは解けないと、落ちるよ」

「じゃ、瞳は解るの？」

瞳は自分の答案を見せた。

「！！！！！」

「痛恨の一撃」

ハァ、たまんねえな。こいつらの見張りは。

この双子姉妹の名前は、『早野^{あいか}哀歌』と『早野瞳』だ。オレと同じ暁中学校のソフトテニス部（女子）だ。どっちが姉なのかは知らないが、知りたいとも思わない。一応、哀歌は部の一番手&部長である。前衛で、力で相手をねじふせるヤツで、とっても元気ものだ。対照的に瞳は、二番手で副部長だ。後衛で、技術で相手を手玉にとるヤツで、静かなヤツだ。しかし、結構瞳の方はクセ者で、時々鋭い突っ込みをする。

双子の似ているトコロは外見。似ていないトコロは性格&力。あと、学力だ。瞳の方が良い。ま、これぐらいで説明はイイだろう。後々わかってくるだろう。

（え、オレのポジションと攻め方？それは後のおたのしみ！）

「えゝなにになに？『サイコロを二回連続で投げて3の倍数がでる確率』か」

「お前に解けるのか」

「失礼な！これぐらいは解けますよゝだ！瞳はどうなの……」

最後の

「よ」

を言う前に、瞳は自分の答案を見せて、

「会心の一撃」

と言った。

「ガッデエエエム！」

ハァゝ。こいつら、漫才でもやってんのか？真面目にやれよ。

「次、英語や英語！」

何故関西弁？

「『I know the girl who live in japan』の和訳か……。」

哀歌に解るかな？

「わかった！『私は日本にすんでいる少女が誰だか知っている』だ
！」

「バカばっか……」

この様な日々が続いた。

そして入試試験の日。

オレはテレビを視ている。

ああ、簡単だな。漢字は『トモナウ』か。『伴う』だろ。そして数

学は『サイコロを二回連続で投げて3の倍数がでる確率』か。勉強したトコがドンピシャじゃねえか！これなら友達も大丈夫だな。あいつも。

「えゝなにに？『サイコロを二回連続で投げて3の倍数がでる確率』か」

「お前に解けるのか」

「失礼な！これぐらいは解けますよゝだ！瞳はどうなの……」

最後の

「よ」

を言う前に、瞳は自分の答案を見せて、

「会心の一撃」

と言った。

「ガッデエエエム！」

ハァゝ。こいつら、漫才でもやってんのか？真面目にやれよ。

「次、英語や英語！」

何故関西弁？

「『I know the girl who live in japan』の和訳か……。」

哀歌に解るかな？

「わかった！『私は日本にすんでいる少女が誰だか知っている』だ！」

微妙に違うようで、あつてゐるみたいだ。

この様な日々が続いた。

そして入試試験の日。

オレはテレビを視ている。

ああ、簡単だな。漢字は『トモナウ』か。『伴う』だろ。そして数学は『サイコロを二回連続で投げて3の倍数がでる確率』か。勉強したトコがドンピシャじゃねえか！これなら友達も大丈夫だな。あいつらも。

そして、運命の合格発表の日。

オレは当然合格した。ま、内定中に何も起こしてないから当たり前だろう。友達には、受かったヤツも、落ちたヤツもいた。オレは何を言えばいいか解らず、とりあえず

「ドンマイ」

と言った。あの双子姉妹はどうだろうか？

ちよと調べに行くと瞳が居たので、

「オッケー？」

と聞くと、

「オッケー」

と返ってきた。哀歌の方を聞こうとすると、瞳は分かっていたみたいで、

「ノープロBLEM（問題無い）」

と言った。

またこいつらと同じ学校か……。何も無いことを祈るか。

そして入学式。オレは『坂ノ上高等学校』に入学した。

ここから、オレのソフトテニス生活が始まると思うと、不思議に気分が高まってくる。誰よりも巧くなりたい。そして、強豪校じゃなくても県大会にいつてやる！

入学式の後で部紹介があった。

オレは目を疑った。

部紹介のパンフレットには『男子ソフトテニス部、四人』と書いてあった。

第五話　ハゲと1ページ目（前書き）

エーすいません。今流行りの病気にかかり三週間ダウン。そのあと、年末だったので遅れてしまいました。本当にすいません。

それに、第四話の文がメチャクチャ&めっちゃめっちゃになっていたのでもっとすいません。以後、気を付けていきます。問題を見つけた場合は連絡をください。あと分かりにくいところも同じく。

第五話　　ハゲと1ページ目

「君達は晴れて我が校に入学したわけではありますが、ここがゴールでは無い。むしろ、ここはスタートである。なので、諸君には初心に戻り、これからの生活を……………」

あゝ、ウツセエなあ。決まり文句ばかり言わないで、もちつと氣の利いたコトいつてくれよ。それより、校長。貴方の髪こそスタートではないですか？ゴールはあるのかな？

この様なコトをオレの頭では考えている。

「えゝ、最後になります。今年度から我が校にも、硬式テニス部を設けるコトになります。部員がいないので、たくさん入ってくれとうれしいです。よろしくお願いします。」

なにぃ！？硬式テニス部を設けるだぁ？ただでさえ少ねえのに、これじゃ誰も入部しないんじゃないのか？クソ。ソフトテニスは独りじゃ出来ねえからどうしよう。

オレはこの様なコトを考えていたので、この先にあったコトは何も覚えていなかった。（なので、次の日は大惨事を引き起こしてしまった。）

その大惨事後……………

「へえー。こんなに早く入部届け出すなんて、気合い入ってるな！渚君、明日から頑張ってくれ！」

「はい。頑張ります。」

オレは入部届けを出した。顧問もビックリしていた。当然だろうな。なんせ、廃部ギリギリのソフトテニス部に入るからな。それに、硬式テニス部も出来たから。

オレは今日から練習に出てみた。

「明日から。」

と言われたが、練習に出た。

コートに行く途中、ラケットを持った瞳がテニスウェアを着て、コートに入っているのを見た。

へえー。アイツも入部するんだなあ。もう一人はどうなのかな？ 裏切らないよね。ま、関係ないか。一先ず、他人のコトより、自分のコトだな。

オレはコートに入ってみると、三人練習していた。その内の一人がオレに気付いたので、声をかけた。

「すいません。今日からソフトテニス部に厄介になる、渚です。あの、練習したいんですが。」

すると、
「お！速いな！女子にも一人いたが、まさか男子にもいるとはな。」
瞳のコトだろう。

「ま、とりあえず部室で着替えて来い。場所は、プールの下にあるからわかるだろう。」 オレは部室で体操服に着替えた。最初からテニスウェアを着るのは、態度がデカイのでやめた。（部室は簡単に見つかった。）

そして、コートに戻ると、さっきの先輩が。

「お！戻ってきたな！じゃ早速打つか！」

「え？もついいんですか？」

「あたり前田のクッサー！」

オレは本能的に、この人のテンションについていけない、と思った。

そして、オレの高校のソフトテニスの1ページ目が始まった。

「お願いします！」

第五話　ハゲと1ページ目（後書き）

できるだけ早く、次話を出したい。と思います。

第六話　くオレ&ラケットの紹介をちょこっととブランクく（前書き）

やっぱり、実名はいけないですね。ちなみにこのラケットは、私が一番欲しがっているラケットです！しかし製造中止にはなっていません。むしろ、逆ですな。ラケットの正式名称がわかった方は連絡を……………

第六話　くオレ&ラケットの紹介をちょこつととブランクく

「ま、ちゃんと準備体操をして、少し素振りをしろよ。」

「あ、すいません。」

危ない危ない。体操しないで行くなんて。壊しちゃうよ。

オレは念入りに柔軟体操と、肩回しをした。そして、足元にある純白の我がラケット、『テラフォース5000』を持った。

『テラフォース5000』……………オレが中二の時、兄貴から貰ったラケットだ。2001年モデルで、とても古く、もう売られていないが、オレに合ってる気がするので、気に入っている。一本シャフトである。

一本シャフトとは、ラケットの面と持つ所グリップの接続部分が分かれていないもの。しなりやすいので、芯に当てれば、シャープな球が打てる。後衛向きと言われている。

逆に、分かれているのは、二本シャフトである。こちらは面がしなりにくいので、シャープに打ちにくいかわりに、面のドコに当ててもコントロールをつけれる。それと、一本と違って軽いところだ。

オレは一本を使っているのが後衛だ。いや、後衛だから一本のまぢがいだな。そう、これは中学一年の夏休みの頃にこれは決まった。

~~~~~

「よし！これからポジションを決めるぞ！」

「先生！前衛、後衛を決めるってことですか？」

「そうだ！好きな方を選べ！」

「どっちにしようかなあ？な！刹那はどっちにする？」

「うーん、そうだなあ。なんか、特徴を知りたいなあ。そして決める！」

「よし！先生！ポジションの特徴を教えてください！」

「ん？特徴か……。そうだなあ、簡単に言うと、前衛は試合を決める！お前達が良く知っている『スマッシュ』や『ボレー』を使つて試合に勝つ！！つまりカツコイイポジションだ！」

「『試合を決める』か。なかなかオイシイ役じゃないか！」

「刹那！オレ前衛にするわ！カツコイイから！」

「じゃ、オレも前衛にするかな。」

「刹那は止めた方がイイぜ。力ないんだからな！オレみたいな力があるヤツが試合を決めるんだよ！」

「カチーン」

「冗談冗談！でもオレは前衛にするぜ！お前は後衛の特徴も聞いてから決めろって！」

「ああ、そうだな。」

「おーし！次、後衛の説明をするぞおー！後衛は簡単に言うと、『試合を続ける』だな！」

（試合を続ける？続けさせたらいけねえだろ？）

「後衛はだな、自分のペアが決めてくれるまで、ずっとボールを打たなければいけない。しかも、相手の前衛に打たれない様にしなければいけない。キツイポジションだ！でも、後衛だからって点を取れない訳じゃないぞ！点を取った時の嬉しさは出来たヤツしか分からねえ！そのために、技術が必要なポジションだ！」

「ふーん？ヤツパ、オレは前衛にする。カッコイイからな！刹那はどうする？」

「オレ、後衛にする。」

「え、なんで？」

「わからない。でも後衛をしなきゃいけない気がするんだ。」

「そつか。頑張れよ！しっかし、前衛希望者多いなあ！競争率たけえ！」

「そりゃ、カッコイイもてるからだよ。」  
「だよな。」

「だよね。」

~~~~~

懐かしい過去だな。って懐かしがってる暇はねえな。早く打ちてえ！

「終わりました、先輩。」

「よし！じゃいくぞ！」

パソコン

スコ

パソコン

カッ

パソコン

パソコン

パソコン！

ガギ

ヤバイな。かなり下手になっている。ボール見てんのに、全然真ん中に当たってない。まずいな。こんなに下手になっているとは。しかもフォームもおかしくなっている。なんでだ？

それは、先輩の球が速いからだ。速い球を打ち返すために、刹那はまだ感が戻ってきてない体を無理矢理動かして、球を打っている。ボールを真ん中に当てられず、フォームが滅茶苦茶になるのはあたり前である。

「あれ？君の力はこんなものなのか？しょうがない。ロブで打ち合おう。」

悔しいが何も言い返せない。本当にダメだからな。

しかし、ロブでのラリーになったので、刹那は次第に元に戻っていた。

お！もとに戻ってきた！この、ボールが真ん中に当たる感じ！懐かしい！フォームも定まってきた。打ち方がよければロブの時だってちゃんとイイボールがいくのだ！ほら、相手を見てみる！あんなに後ろにいて。

刹那が打つロブはどうやら、綺麗な放物線を描き、相手コートを深

いところでバウンドしていた。

よし！戻ってきたので、少し強く打ちたい気分だ！
早速大声で叫んだ。

「先輩！戻ってきたみたいなので少し強く打ってもいいですか？」
「お！やっと戻ってきたか！よしドントコイ！」

「先輩も少し強く打ち返してくださいね！」
そして、オレは少し強くうった。それは、あの中学三年の最後の試合で当たり前の様に打っていた球筋だった。

第七話 〱先輩方&兄貴&男と女どっち？（前書き）

この小説堅いですよね。なんか明るくなるように、明るいキャラクターをだそうかな！？

第七話　く先輩方&兄貴&男と女どっち？

よっしゃー！やっとな自分の納得する球が打てる様になったぜ。この感じ！快感！

真ん中にも当たってるし、フォームもたぶん戻ってきたはずだ。先輩とちゃんとラリー出来てるし、ブランクがあるわりには結果イイ線いってんじゃない？

この調子でラリーを続けた。さすがに先輩がシュートボール（速くネットスレスレにいく球）を打った時はそんなに綺麗には打ち返せなかったが、普通の球は綺麗に打ち返せた。（全盛期だったら打ち返せたはずだ！オレも打ち込みたかったがそれは生意気だろ？）

「そろそろ終りだ。練習始めなきゃな。」

「はい。わかりました。」

「上手だな！これなら一年レギュラーも夢じゃないな！」

「ホントですか？」

「ああ。人数足りないからそうなるだろう。あと一人経験者がいればな。」

「経験者が……。来ますかね？」

「難しいトコだな。硬式が出来たから。」

「……………」

「まっ！落ち込むな！人生晴ればつかの日だけじゃないんだから！せっかくの男前がだいなしだぞ！」

「ハア。」

「気の抜けた返事はしない！テニス部のプリンスが言っただから間違っていない！」

（この人、絶対自信過剰だな。）

「わかったら練習始めるぞ！さあ集まって集まって。」

オレは先輩達（と言っても三人）のトコロに集まった。そして自己紹介を始めた。

最初に、オレとさっきまで打っていた人が紹介してくれた。

「オレは三年五組、浦沢直樹うづらさわ なおきだ。ポジションは後衛。得意なプレーはコースを変えることで、嫌いなプレーはスマッシュかな？ちなみに出席番号は二番で、彼女いない歴是一年。好きな食べ物はイクラでキレイな食べ物はうに。好きなタイプは……………」

「ストップ！誰がそんな細かいトコロまで紹介しろと言った？」

「まあいいじゃないか、我が女房！」

「女房じゃない！女房役だ！しかもポジション的に女房役はお前だろ？」

「なるほど、なるほど、なるほどな！」

「ハア。すまん。オレは三年五組、さいとうかさ齊藤宰。前衛で、この馬鹿のペアだ。あと部長だ。一応。」

「オレだって副部長だ！部長だからって威張るなよ」

「宰はお前と違うから大丈夫って。」

「あつ、オレ三年二組の田中修しゅう。後衛ってヤツ。よろしく。」

齊藤先輩と浦沢先輩と田中先輩か。

「部長。あと一人は？」

「あと一人は再テスト喰らっているだけだ。名前はいちじょうがすけひろ一条和弘。前衛でオレと同じクラスだ。」

ふん。部長と同じクラスってことは三年か……。ん？つーことは、先輩方はみんな三年生。二年生はいない……………！？！

「先輩！二年生はいないんですか？！」

「ああそうなるだろう。そしてオレ達が引退したら、お前が天下を取るんだな。」

「イイじゃないの？うざくないし。」

「オレ達の時は十人いたのに羨ましいぜ！」

先輩方からの一斉放火を喰らってしまった。

そうか……。もうオレの世代になるんだなあ。それもいつか！

「そんな先の事より君の紹介をしてもらいたいな。」

「ハイ！わかりました、浦沢先輩！

オレは渚刹那です！中学ん時は後衛をやっていました。よろしくお願ひします！」

「渚？渚ってもしかして……………」

「ハイ、渚隆治しゅうじの弟です。」

「渚先輩の弟か！そりゃ上手い訳か！

オーイ塩崎！コイツ、渚先輩の弟だつてよ！」

塩崎と呼ばれた女子の先輩が振り向いた。

「え、マジ？それならかなりの期待の新人じゃん！」

そう、オレの兄貴、渚隆治はこの学校のOBだ。そして、かなりテニスが上手で、県大会出場者だ。

中学時代もこの様に言われたので辛い。オレは兄貴から全てを習ったといつても過言ではない。

（兄貴の紹介はまた後で）

この様に言われた後、練習が始まった。メニューは中学時代とあまりかわらなかったが、質が違っていた。スピード、重さがレベルアップしていた。

ついていくのに精一杯だったが充実した初日だった。

次の日、オレは部室で着替えを済ませ、コートに行こうとすると一人の人間がいた。男か女はわからなかった。身長は低く、155センチぐらいで、手にはソフトテニスラケットのケースを持っていた。

もしかして新入部員か！？

オレが凝視していると気配を感じたのか、振り向いた。そしてオレの他にきて

「すみません！ソフトテニス部の部室ってどこですか？」

まだオレの部活人生は2日目。始まったばかりだ。

第七話 　　ゝ先輩方&兄貴&男と女どっち？（後書き）

結局出ませんでしたね。次はこの男？女？の紹介がメインです。あと、刹那の兄貴の紹介かな？

第八話　く抱きしめたい&パンドラの箱く（前書き）

さあ真相はいかに！？

第八話　く抱きしめたい&パンドラの箱く

身長155センチぐらい。

顔は美少年、美少女どちらともとれる、整った顔付き。髪はサラサラしていて、ただ伸ばしている感じ。前髪は目にかかっている。頭には白い帽子、服装はこれまた白いウインドブレイカーの上下。荷物は白いエナメルバッグとラケットケース。全体的に白を基調とした格好。男でも女でも可愛いと呼ばれる雰囲気だ。

で男なのか？女なのか？わからん！

刹那は悩んでいた。

どうする！オレ！男女の判別が出来ないくらい目の視力が落ちたのか！？普段からもつとブルーベリー食べておくべきだった！何か案はないのか？うん……………。そうだ！名前だ名前。『太郎』とか『一郎』みたいな名前だったらすぐに判断出来るぜ！

「まあ落ち着いて。まず自己紹介をしよう。オレは一年二組の渚刹那。よろしく。」

「同じ一年だったんだ！良かった！ボクは一年五組の早野美琴。美しい琴って書いて『ミコト』っていうんだ！」

一人称は『ボク』。名前は『ミコト』。わからん！もっと区別出来る様な名前をつけろよ！ともかく、もっとややこしくなってしまう……………。

「どうしたの？渚君。なにやन्दるの？」

「い、いや、何でもない。ひとまずオレ、着替えてくるから。」

「荷物は？」

「部室に置けばいいじゃない……………あ！そうか！」何も悩む必要なんてないじゃないか！こうすればいいじゃないか！

まず『オレについてこい』と言って男子部室の前に連れていく。

←
オレは何気無く部室に入る。

←
美琴が入ってからオレは着替え始める。（入らなかつたら女の子）

←
はずかしがったりしたら女の子。反応無しは男。

もし女の子だったら『女子は隣』と言えばOK！

完璧だ！自分の才能が恐いぜ！

「なにか思いついたの？」

「ああ。我ながらいい作戦をね！」

「え！どんな？それって後衛？前衛？」

「いや、まあ。秘密だ。ライバルになるやつにそう易々と教えられない。（テニスの作戦じゃないんだけどなあ）」

「えゝ。ボク、女子にも球のスピード負ける様なヤツなんだよ！」

「女子にも負けるのか！？情けないなあ……………ってオイ！」
コイツ、男だったのか！オレの作戦が……………。オレが瞬時に思いついた作戦が……………。こう無惨に崩れるとは。シヨックだ……………。泣きそうだ。

「????」

美琴がオレの方を見てキョトンとしている。オレがこんな状況になる理由は迷宮入りだろう。

「あの、どうかした？」

美琴がオレを見上げて話し掛けた。

「身長が20センチ違うので自然とこうなる」

その姿はとても可愛くて、とても男とは思えなかった。

だが、男だと知ったオレは、キュンとはこなかった。（当たり前だが）

「いや、どうもない。作戦はいつか話してやるからひとまず部屋に行くぞ。」

「うん！」

いつかオレが『男の言葉使い』を教えなきゃな。そう考えたオレと美琴の初めての出会いだった。

「部屋にて」

「まだ先輩達は来ていないみたいだな。」
オレは着替えながら呟いた。

「そうみたいだね。」

美琴は特にオレの着替えを気にせずに答えた。（ま、男だからな。多分）

しばらく経つと、美琴は部室の探索を始めた。

「あ！見て見て！マンガがたくさんあるよ！『ドラゴ○ボール』や『デス○ート』、『カ○タ』スゴイ！『Over-○rive』もある！」

『あ、ホラ！ラケットやシューズもたくさんある！もらっちゃおうかなあ。でも、どちらとも今使ってるヤツ気に入ってるからイヤ！』

うるさい。美琴はさつきから機関銃の様に喋りまくっている。最初は返事はしていたが後から面倒になったのでやめた。それなのにまだ喋っている。社交的な、コイツは。

結局、オレが着替え終えるまでの三分間ずっと言葉をはっしていた。

ようやく着替え終えたぜ。（今日も体操服）ラケットも持ったし、良し！

「じゃ美琴行くか！」

「うん！………あ」

「ん？どうした？」

「コレ。」

美琴が指さしたのは、この高校のソフトテニス部の成績だった。

「スゴイね。平成になってずっと県大会出場してるみたいだね。」

「ああ、そうだな。」

オレも成績の記録を見て驚いた。日付だけではなく、選手の名前、主にしていた練習方法も書いてあった。

「あ、見て。平成三年全国大会出場だつて！でもここが、全盛期みたい。」

確かにここが全盛期みたいだ。そのあと県大会には出場しているのだが、それ以上の成績はない。

「一昨年で県大会出場も止まってる。残念だなあ。最後の出場ペアは『渚 隆治』と『城崎 守』か。スゴイ！この人達、一年生の時から県大会出場してる！一年からレギュラーだったなんてとても上手かったんだろうなあ。」

オレは心から祈っていた。『渚 隆治』がオレの兄貴だと気付かないことを。

「ん？『渚』って……………」

気付かれたか……………」

「ねえ渚くん。もしかしてこの人、渚くんのお兄ちゃん？」

オレは黙ってうなずいた。

「へえーそうなんだ！驚きだなあ。きっと弟の君も上手いんだろうね！」

「比べないでくれないか？オレ中一の時もそう言われて傷ついたんだ。」

そう。中一の時もこう言われた。そして勝手に期待され、勝手に失

望された。『しょせん弟だな。兄貴は上手いけど、弟は普通だな。』
などと言われた。オレは悔しかった。ただ兄貴よりも下手というだけで馬鹿にされて悔しかった。だからオレはがむしやりに練習をして、部の一番手になった。でも兄貴の様に県大会にはいけなかった。それどころか、地区大会さえ勝ち抜けなかった……………このことはオレの中のパンドラの箱だな。

「ごめん。お兄ちゃんはお兄ちゃん、渚くんは渚くんだよ。ボクが馬鹿でごめんなさい。」

美琴はシュンとなって謝った。前髪と帽子のせいでさだかではないが、涙目になっているみたいだ。

オレは慌てた。

「ちよつ、これから気をつけてくれればいいから！そう落ち込むなよ！」

何だかオレがいじめたみたいじゃねえか。

「ホント？許してくれるの渚くん。」

「ああ、許すよ。今日会ったばかりなんだからその位目を瞑らないと。あと、オレのこと刹那って呼んでくれ。その方が嬉しいから。」

「わかったよ！刹那！じゃあ、ボクのことは美琴って呼んでね！」

この時、美琴に笑顔が戻った。

ヤッパ、こういうキャラには笑顔が似合うな。

「よし！じゃ先輩達がくるまで乱打するか！美琴！」

「オッケー！刹那！」

二人ともラケットを手に持ってコートに向かった。

オレ達の間には友情が生まれたみたいだった。

なんてね！

第八話　く抱きしめたい&パンドラの箱く（後書き）

ホントは逆にしたかったんですけど、男の方が頻繁にですのでもうここにしました。

第九話　真相の真相

「イチニサンシ、ゴーロクシチハチ。にーにサンシ、ゴーロクシチハチ。」

オレと美琴は準備体操をしている。肩まわしやアキレツ腱、屈伸などを。でも声をだすと恥ずかしいんだなあ。高校生になっても声をだしながら体操するなんて。美琴ってスゴいんだな。中学の時こんな風だったのか？聞いてみるか。

「なあ美琴。中学の時も声だしながら体操してたのか？」

「うん。そうだけど？」

「チームメイトも一緒に？」

「ううん、ボクだけだったよ。一年生の時は他にだしていた人はいたけど、すぐにいなくなったなあ。」

「恥ずかしくない？」

「なんで恥ずかしいの？別に变じゃないじゃない！」

「ふーん。そうだな。」

つまり人目を気にしない、マイペースなヤツなんだな。それにしては服装は白に統一してるな、なんでだ？

「よし！準備体操終わりっとなぎ…刹那、打とう！」

「……………ん？ああ打とうか。」
また後で考えよう。

「それにしても久しぶりだなあ。打つの！変な所にうつても恨まないでね！」

「オレだって昨日から打ち始めたんだから人のコト言えないんだぜ？おあいこだ。」

「刹那って昨日から来てたんだ！ボクも来れば良かったね！」

「じゃ、なんでこなかったんだ？」

「だって、古賀先生が『明日から！』って言ったから。」

「古賀先生って……………誰？」

「え！？顧問の先生だよ！入部届けだしたんでしょ？」

「ああ、あの顧問の先生、古賀って言うんだな。オレも言われたけど行ったんだな。」

「あゝあ、やっぱり来れば良かった。」

「そんなことより早く打とうぜ。」

「あ、うん！」

へえ、なかなか上手じゃないか。返ってくる球はロブだけどちゃ
んと真ん中に当てて、ドライブも適度にかかっているし、フォーム
もキチンとしている。腰も落としていて、深く打っている。
少なくともオレよりロブは上手いな。シュートボールもキチンと返
すし、コントロールも抜群だ。

パコーン

ポーン

パコーン

ポーン

パコーン

ポーン

ポーン

ポーン

なんでロブしか打たないんだ？いくら久しぶりだからってロブが
ちゃんと打てるんだからストロークも少しは打てるだろう？

もしかして、遠慮してるのか？あの性格だからそうかもしれないな。

オレは打ちながら大声で話した。

「なあ美琴。遠慮せずにストローク打ってもいいんだぜ？」

「いいよ。ボク、ストロークダメなんだ。ロブだったら自信あるけどストロークはね……………」

「いいから打ってみろつて。」

「うん。」

やっと打つのか。やっぱり遠慮してたんだな。見た目は非力だけど、物凄い球打ったりしてな！

オレの期待は裏切られた。

。オレの後衛五原則、『速い』『深い』『重い』『鋭い』『コントロール』の内の『コントロール』しか満たしていない。

確かコイツ後衛だよな。初めて会った時『後衛だったら』とか何とか言ってたからな。ダメじゃん。本当に後衛だったらつらいんじゃないのか？確かにロブは重要だけどそれだけじゃ勝てないだろ。

オレも五原則の内『速い』『重い』を満たしていないからそう言えないが、高校ではキツインじゃないか？

中学の時はどうやって勝ってたんだ？相手のミスが大半じゃないのか？

「ごめんね……。ボク、ストロークは嫌いなんだ。だから、そんなに練習してないんだ。」

「理由のあるのか？」

理由を聞けば納得するかもしれないからな。

「それは……言えない。」

「は？理由ぐらい言えよ。練習しても上手くでなかった。とか、ぶつけてしまつて怪我させた。とかそんなとこだろ？」

「そんなんじゃないもん。そんなんじゃない……。……。」

美琴はまた泣きそうな顔になっている。

また、オレが泣かしたようじゃねえか。コイツ、ホントに男なのか？

「わかったよ。聞いたオレが悪かった。オレも話したくない理由がある話があるから話さなくていい。」

「ごめん、いつかは話すから。」

「無理しなくていいぞ。」

「うっん、刹那なら信頼出来そうだから。」

「え？」

涙目になっている美琴が訴えている。

オレは美琴の顔を見て、不思議な気持ちになった。

信頼している？今日出会ったばかりのオレを？それに、『刹那なら』

って、今まで信頼出来そうなヤツと会ってないのか？

オレはまだコイツを信頼していない。だが、コイツはオレを信頼している。不思議なヤツだな。

「わかったから！信頼を背く様なコトはしないから！な？涙を拭いて先輩が来るまで待つところぜ。な？」

「うん！」

美琴の顔にまた笑顔が戻った。

まさかとは思うが、コイツ、オレのこと好きなんじゃないか？恋愛みたいな好きで。

まあ確かにコイツは可愛いぜ。コイツが女だったら惚れているだろう。だがコイツは男だろ？……………いや、待てよ……………。

ホントに男だとは限らない。まだ証拠がない。もっともてつとりばやいやつは、男の勲章の有無だろうが、調べるには勇気がかなり必要だ。結果が女だったらオレはただの変態となるだろう。

クソ、どうすれば……………そうだ！トイレに誘えばいいじゃないか！頭イイなオレ！

「ちょっとトイレ行かないか？ションベンしに。」

「うん、打ってた時の汗が冷えてボクもしたくなっちゃったから行こう！」

ナイスタイム！これでホントの『雌雄』がわかるぜ！

「なんで嬉しそうな顔してるの？刹那。」

「い、いや。別に。」

「あ、さてはエッチなコトを考えていたんでしょ。残念だけどボクにはそんな趣味はないから諦めてね！」

ま、また泣きそうだ。オレの作戦が使われずに破棄されちゃった………いや、完璧に確認するためにまだ必要な策として残しておこう。

ここは馬鹿にする様に話した方がイイな。

「え？そんな趣味って……お前男だったのかよ！」
ふざけていつてみた。
すると怒ったみたいで

「あ、刹那までこの格好馬鹿にするの？これ全部お姉ちゃんのお下がりなんだから仕方ないでしょ！お姉ちゃんが白好きだったから、ボクの服装も白になっちゃうの！ホントは自分で服を買いたいんだけど、お金がもつたないからボクの服は全てお姉ちゃんのお下がり。」

「全て女ものってコトだよな。ならスカートとかもはいてんのか？」

「まさか！そんなのボクの男としてのプライドがゆるさないね。」
よっしあ！これでコイツは男決定！！ミッシェンクリアだ！

そのあと、トイレでも男であると決定した。

トイレを済ましたあと、コートに行くと先輩達がいた。が、一条先輩だけはまたいなかった。（みたことないからいたってわからないけど）（あとから聞いた話によると、一条先輩は追試だったそうだ。

）

その後が大変だった。

まさに見た目が女の子の美琴の登場により女子の先輩達や男子の先輩達（特に浦沢先輩）はとても嬉しがっていた。『マネージャーが来た！』とか『マイナスイオン発生機が来た』とか『カワイイ』、彼氏いる？』とかでとても激しかった。

だが、美琴が男だとオレが発表すると、女子の先輩達はさらに盛り上がったが、男子の方はいつもにもどった。美琴は女子の先輩達にちやほやされて、嬉しい様な、申し訳なさそうな顔をしていた。

その日の練習は乱打だけであった。その時も美琴はロブしか打たなかった。

部活が終わると部長から

「明日、一年生部員勧誘だ！」

いつかはるたを思っていたが

きついな.....

第十話 、『主人公早野美琴!?’ & 太陽の周りの虹 (前書き)

更新遅いですよね。

第十話　『主人公早野美琴！』&太陽の周りの虹

『こんにちは！』もしくは『こんばんわ！』　またもしくは『おはよう！』

坂の上高校一年の早野美琴デス！！

身長155センチ、体重42キロ、視力は左右とも2.0で聴力異常無しのとつても健康な男の子デス！

えっ？名前が女の子くさい？体格が女の子？髪が長くて女の子くさい？言葉使いが女の子？顔がカワイイ？泣き虫？性格が女の子？

失礼な！

まず、体のことと名前は仕方ないでしょ！自分が決めれるわけじゃないし、顔だってお母さん似なんだし、体重だつて太ってるよりマシだし、髪型だつて短いより長い方が似合ってる。友達に整髪料をつけてもらつても、サラサラしすぎて一気に半分使つてしまつちやつた！言葉使いはもう直せないよ。癖になつてるから。泣き虫や性格も同じだよ！でも、泣き虫はいつか直してみせるよ！

確かにボクは女の子に見えるかもしれないよ！初めて会う人からは女の子として扱かやれる時もあるし、小さい頃は『お嬢さん』とよくよばれた。（今でも時々呼ばれるけど）

でも、ボクは男！勲章だつてあるし、制服も男のブレザー。戸籍だつて！

あ！一番大事なことを忘れてた！ボクの生き甲斐をね！

ボクはソフトテニス部に入部しているんだ。え？なんでソフトなんだつて？それは、ボクが入学した中学にはソフトしか無かつたからだよ！

三年間ずっとやってたんだけど、地区大会での個人戦第四位が最高。え？練習がたりなかつたんじゃないのかつて？

違う。そんなの絶対違う。練習だって一年のころから誰よりも練習してた。でも、そのせいでボクは……。ううん、なんでもない。理由はいつか話すよ。渚くんにもはなさなきゃいけないし。

あ！渚くんは同じソフトテニス部の友達だよ！ボクと違って背も高し、カッコイイし、ソフトテニスも上手い！一度乱打してみただとスゴく上手かった！もしかしたら中学の時イトコロまで行けたかもしれないね！今度聞いてみよつと。

それに、少しぶっきらぼうみたいだけど、信用出来そうな人なんだ。

え？他にチームメイトはいないのかだつて？

あ、そうそう。なんでボクがこの様にはなしているかというと、渚くんには悪いけど、これからの話はボクが主体になるからなんだ！実は、ボク達のソフトテニス部には三年生四人と一年のボクと渚くんしかいないんだ。あと一ヶ月もすると三年生の最後の大会が始まって先輩達が引退してしまつて二人だけになってしまう。それを断固阻止するために、昨日先輩から『明日は部員集め！』って言われたんだ。

で！渚くんに、一緒にやろうつて言つたんだけど『悪い、オレ、苦手なんだ。だから美琴に任せる』って断られたんだ。チョットシヨツクだったなあ。

でもボクはくじけないよ！たった二人だけだと団体戦にでれなくなっちゃう！個人戦でも行きたいけど、やっぱり団体戦で県大会に行かなくちゃね！！

だからボクは部員を集める！渚くんもあんなこと言うけど一人は集めるはずだ！でボクは三人集める！すると六人でちょうど団体戦の人数になる！

よし頑張るぞ！新設の硬式テニス部に勝たなきゃね！！

一年生は全部で500人。一クラス50人の十クラス。まずは同じクラスの人を誘ってみるかな？

中学の時と違って素晴らしいチームメイトが出来ます様に………。

あ！もうこんな時間！遅刻しちゃうよ。

ボクは急いでカバンを持って外に出た。そして大声で
「いつてきまゝす！」

その日は曇一つもない快晴である。美琴の通学路の桜は風で散り始めたころ。そこを美琴は走っている。

ふと美琴は立ち止まり太陽を見た。

太陽はいつもの様に輝いていたが、その周り、太陽を中心として円い虹が出来ていた。

美琴はいつか姉から聞いた言葉を思いだした。

『太陽の周りに出来る虹には意味があるのよ。曇が一つもない日にできたら素敵な出会いがあつて、曇が一つでもあつたら辛い別れがある。っていうものなのよ。もし曇一つもない日にできて、見るのと出来たならその日は大切な日になるはずよ。』

美琴は姉の言葉を信じてまた学校に向かって走りだした。

「今日は素敵な出会いがある日！大切な日になる日！よってボク達のソフトテニス部が完成する日だ！やったー！」

渚刹那がソフトテニス部に入部した日から三日目の早朝。
太陽はこれからの日々を暗示していた。

第十一話　　く虹の効力　美琴編　前編く

「ねえ！ソフトテニス部に入らない？楽しいよ！」

ボクは何回このセリフを言ったんだろ？少なくともクラスの男子全員（24人）分は言ったなあ……。ううん、一人休みだから23回かあ。意外と集まらないなあ……………。

今は昼休み。美琴は机に肘着いて午前中のことを考えていた。

美琴は学校に來たと同時に勧誘始めた。といっても遅刻スレスレだったので一時間目が終わった後だったのだが、先輩の命令通り部員集めを始めた。

美琴はもうクラスの中でもいい感じのポジションについているので話し掛けるのは簡単だった。だが、本題のことを話すと

「もう入ってるから。」

や

「もう決めてる。」

や

「廃部寸前の部活はねえ。」

などと言われてことごとく失敗した。
なので美琴は今、しょぼくれている。

お姉ちゃんのウソつき。全然出会いなんて無いじゃない！もく、またからかって言ったのかなあ？でも顔は真面目だったから……………はあ、当たり前はあるだろうからしょうがないよね。

むく、でも少なくとも一人は集めたいよ。休みの子が入部するっていうマンガみたいなことはならないだろうし。

よし！こうなったら他クラスからも勧誘しちゃおう！もうこれっきやない。『善は急げ』だ。行こ！

そういつて教室を出ていった。

渚が言った様に、美琴はかなり社交的で人付き合いが良いので、初対面の人でもすぐに仲良く出来る。仲良く出来るのだが本題は成功しなかった。

ダメだ……………、ボクは燃えカスが一つも残らない様に燃やされて出来た真っ白な灰みたいだよ。

真っ白な灰は教室を目指す。灰の周りには悪魔も驚く様な絶望が渦巻いている。その絶望は、美琴のハイテンション貯金をかつさっている。

そして灰が教室のドアに手を掛けた時、美琴のハイテンション貯金の残金が銀行の利子ぐらいになった時、誰からかよびとめられた。

「おーい、美琴。」

えっと……………この人はウチのクラスの……………

「祐二君だよね！なあに？」

そうそう！祐二君！

本名は日下部祐二で、高校生になって一番最初に出来た友達だ！背は剎那君より大きい180センチぐらいかな？運動神経はトップクラス！頭もトップクラス！スタイル&顔もトップクラス！まさに天から全ての才能を貰った様な人！うらやましい。
(もちろんこの人も誘ったんだけど『廃部寸前』という理由で断わられた。)

「簡潔に言うけど、今日ウチに来ないか？」

「うーん、行きたいけど部活があるから……」

「ゴメン」

と言おうとしたら

「ああ、ちなみに今日、部活禁止だから大丈夫だ。それにたくさん遊べるぜ！」

え？部活禁止？なんでだろ。別に自然災害なんて起きてないのに……。

祐二君に聞いてみると

「たぶん、この間のテスト関連で先生達が忙しいんじゃないの？良く知らないけど。」

だそうだ。テストなんてクソくらえだ！いろんな意味で……。

「なあ、あそばねえか？」

ううん、部員集めという重大な使命があるんだけど、やるだけのことはやったよね！クラスの中だけじゃなく、他クラスからも誘ったんだから！

うん！あそんじゃお！それに大切な友達なんだから！

「うん！イイよ！遊ぼ！」

「よっしゃ！じゃ次の休み時間に打ち合わせしようぜ。」

「なんで今からじゃないの？」

「教室に入ってみるよ。じゃオレも先に行くから遅れるなよ！」

そう言うのと祐二君は走っていった。

え？なんで教室なんだろ……。そういえば、馬鹿にボクのクラスは静かだなあ。

美琴は不思議に思いながら教室を開け、そして入った。

その三十秒後、ドアが勢いよく開き、美琴が慌てて出ていった。

開きっぱなしのドアから教室の黒板が見えた。黒板には『次の理科は理科室！遅刻者はオシリペンペン（へへ）』と書いてあった。

美琴は理科室に向かって廊下を全力疾走していた。

そして、最後の曲がり角を曲がろうとすると急に人が出てきた。

美琴は、急なことだったので避けきれず、また相手もそうだったらしく、まともにぶつかってしまった。

「わっ!!」

「きゃ!!」

ガシャーン!

あいたたた、ついてないなあ。よりによっていそいでる時にぶつかって、その上、筆箱の中身も飛び散るなんて。ホントに今日は特別な日になるのかなあ。

と、思いながら目を開けてみると、足元には散らかった文具と教科書、目の前には座り込んでぼーっと美琴の方を見ている少女がいた。そしてしばらく見つめあっていると、美琴は予鈴の音で我に帰った。相手もそうだったらしくはとした。

「ごめん!! 急いでたから! 大丈夫? 怪我はない? ボクはその……えっと……。」

「ううん、平気。あなたこそ大丈夫?」

「うん、平気平気!」

「私こそ急いでたからゴメン。」

「じゃああいこだね!」

すると相手は笑いだした。つられて美琴も笑いだした。

廊下に二人だけの笑い声が響く。

そしてまたしばらく時間がたったあと美琴は我に帰った。

やばい！遅刻しちゃう！ロスっちゃった！急がなきゃ！！

美琴は急いで文具と教科書を拾い、立ち上がって最後に

「すいませんでした」

と言って理科室に向かってまた全力疾走した。

少女はまたぼーっと美琴を見つめていた。

すると少女の後ろからその少女にそっくりの少女が現れた。

「なにしてんの？ついに瞳も瞑想する歳になったの？」

「哀歌と違って悩みを持つ人間だから当然でしょ？」

「ふん！どうでもいいから早く教室に戻らないとヤバイって！」

「そうね。」

少女達は走り始めた。

これが美琴と瞳の初めての出会いだった。

第十二話　虹の効力？刹那編（前書き）

言い訳はしません。全ては私の不注意によってケータイが……。

評価ありがとうございます！参考にしたいと思います！

二ヶ月以上も開かないと、他のかたの小説も大分進んで読むのに大変でした！

ではどうぞ。つまらないと思いますが…。

第十二話　虹の効力？刹那編

六時半、目覚まし時計がなっている。

ピーピー、ピーピー、ピーピー、ピ。

「ふぁ……もう朝か。」

刹那がいつもと同じ様に起きた。早起きに思われるかもしれないが、学校は進学校なので朝は早くなるのだ。

刹那はいつもの様にテレビをつけた。

「さて、今日の運勢はと………まだ早いかな。」

テレビでは天気予報が流れている

今日の天気は全国的に曇一つもない素晴らしい快晴になるでしょう。また降水確率はゼロパーセントでスポーツ日和です。ですが、紫外線が強く、十分気をつけましょう。また今日のたいよ……

ん？だいたい占いの前に天気予報とかあったかな？………いやない。ってことは……チャンネルがちげえ！間に合え！………セーフ。間に合ったみたいだな。

えーっと、一位、二位、三位、四位、………、十位、十一位、十二位………。十二位デスカい。しかも、『何事も上手くないかない。行動は自粛せよ。目立つことはするな。外では足下に気をつける』かよ。美琴に部員集め任せて正解だったみたいだな。今日は早めに学校行つて一日中ボケーと過ごすか。

そう思うと刹那は素早く準備をし、ご飯を食べ、親から作ってもらった弁当を鞆にツツコミ出発した。

「いつてきまーす。った！」

何かにつまずいた。後方を見ると、刹那はいつもはつまずかない玄関の段差につまずいたみたいだった。

おいおい、占い通りかよ。これは下を向いて登校した方がいいみたいだな。他人から見られたら変に見えるだろうが、仕方がない。

そう思うと刹那は下を向いて歩き始めた。太陽なんて見ずに……。

刹那は何事も無く無事に帰宅した。
もし今日の事を日記に書くなら

『今日の占いが十二位だったので、占いの忠告通りに過ごしました。なので今日は平穏無事な一日でした。でも不思議な事に、朝、窓から登校の風景を見てみると、遅刻ギリギリの時間帯に美琴がウキウキしながら登校してきました。それはまさに嬉しいことが必ず起きる！みたいな顔でした。ちょっと気掛かりです。明日も今日の様な日が続くといいなあ。』
と書くであろつ。

十一時半。刹那は万年敷き布団で眠りについた。今日、太陽の周り

に虹が出来ていたことなど知らずに。

第十三話 く虹の効力？早野哀歌編く

ピピピ、ピピピ、ピピピ

うつさいなあ。瞳、早く止めてよ。なんで六時に起きる必要があるのよ。

だいたい、部屋が隣同士なんだから、こちらに迷惑がかからない様に同じ時間帯にしてほしいわ。あの頑固者！

ピピピ、ピッ

やっと止まった。さて二度寝、二度寝♪

これは、早野（姉妹）家の姉妹の朝の日常である。

妹の瞳は六時に起き、姉の哀歌は六時半に起きている。目覚まし時計の時間帯が違つかつ、部屋が隣のため哀歌はいつも瞳の目覚まし音で起こされている。そして止まると、二度寝を開始する。三十分後、自分がセットしておいた音で起きる。

小学生の頃は二人とも六時であったが、なぜ、起きる時間帯が違う様になったのかというのは、中学生になって初めての定期テストで哀歌は、テスト直前日の夜だけ猛勉強。

いわゆる一夜漬けを行ったため（瞳は効率よく勉強した）、次の日から体が六時に起きるのに拒絶したために起きられず、六時半に変わってしまったのだ。たかが三十分と思うかもしれないが、されど三十分なのである。瞳にも六時半起床させようしたが、無駄に終わった。理由は、自分に甘くなりたくない。だそうだ。哀歌は『私のために』と頼んだが、『勉強しないからよ』という言葉が心の急所にあたり、すごすごと退散した。

テストが終わっても六時半起床が変わらないのは体が楽を覚えたからであろう。しょせん、意思の弱い人間である。だからといって、朝はバタバタしないといけなくなったというわけではない。年頃の少女と同じ様に髪をセットしたり、ミサंगाを着けたりと余裕がある。もちろん、ご飯もかかさず食べている。しょうじき、哀歌の方が適切な時間に起きているのである。

哀歌が二度寝している間、瞳は何をしているかというところ……それはまた別の話で。

タータータ、タ、タ、タ、タ、タータータ、タ、タ、タ、タ、タッ

ケータイからラジオ体操第一が流れる。ただいまの時刻は六時半。哀歌の起床時刻である。

ん~~~~~良く寝た！さて、ご飯ご飯！

おはよう！または、（私は、起床したばかりだから『おはよう！』であってほしい）こんにちは！もしくは、こんばんは！早野哀歌です！坂ノ上高校に入学したばかりのピツカピカ（もしくはピツチピチ）の女子高校生！

ここでちよつとマイプロフィールを。

身長、体重は内緒。もちろんスリーサイズも内緒。まあ、標準だけどね。趣味は肉体強化。その為、ダンベルやスポンジボールが部屋に貯まっている。特技は、短期間での暗記力！（この特技のおかげでテスト勉強は一夜漬けに）学力は公立の進学校に入学出来るくらい。まあまあね。そして、私は双子の姉！もちろん、妹がいる。一

卵性双生児なのでそっくり！妹は瞳といい、紹介はあの子自身がするでしょ！

部活は中学の時はソフトテニスだったけど、高校ではまだ決めていない。続けるかもしれないが、変えたり、しないかもしれない。それより私は恋がしたい！だって女の子だもん。一応、好きな人はいるんだけど……それは内緒！今は普通に話しているからそれだけでいいよね！でもいつかきつと………

「哀歌……それはないんじゃない？」

「え？どうして？」

「普通はさ、自分で髪に癖をつけたりしないよね？なんで、ボサボサにするの？」

（これだからファッションに疎い瞳は困る。流行は絶えず変化して
るの。だから今時の女子高校生は敏感に反応しなきゃ。でも教えて
あげない。）

「これ？ちょっとしたイメチェンかな。」

「ふん。」

「どう？瞳もやってみる？いつもショートカットばかりだと、
もてないよ？」

「いい。髪型だけで、私のステータスを決める様な男は、こっちからおことわりだから。」

「なんか、悟ってるね……。」

『いつてきまゝす！』私と瞳は学校に向けて歩き始めた。

なあんか、今日は気持ちいいわね。雲一つもない快晴だし。なんか今日ありそうな予感♪

瞳も同じ気分みたいだ。空ばかり見てる。そして、空を見ながらワクワクしてる様な顔になった……………危ない。私は本能的に感じた。瞳に目をつけられない様に今日はおとなしく過ごそうと。

そして、瞳と同じ行為（空を見上げる）は瞳が瞳にとっての『普通』に戻るまでしないと。え？何故って、瞳と同じ体験はしたくない。したらいけない気がするんだもの。

もし、哀歌が日記をつけるなら刹那と同じ様になるだろう。ただ一つ異なる点は

『今日は瞳がいつもにもまして危ない気がしました。朝は空をみて
ワクワクしたし、授業が始まる前、廊下で悟りを開いていたし。と
にかく危険な気がしました。明日からはあってほしくないです。お
願いします神様……。』

と書くことだろう。

第十三話 く虹の効力？早野哀歌編く（後書き）

虹の効力は長くなりそうです。

第十四話　虹の効力　早野瞳編

ピピピ、ピピピ、ピピピ、ピピピ、ピッ

「ふあ、ん」

私は、目覚ましを止め、大きなノビをした。

はじめまして！、もしくは、お久しぶり！（これは無いよね）

早野姉妹の妹の方、早野瞳です。簡単に私のプロフィールを説明すると、身長は160センチ位。体重は………やめとくわ。なんか殺気を感じる。『そのプロフィールはあんただけじゃない！』と心に聞こえてくる。

スリーサイズも言わない方がいいみたいね。

ふと思ったけど、女の子が自分の身長体重を話さないのはなぜなの？見た目は痩せて見えるけど、本当は太っていることをばらしたくないから？そこまでして見た目を良くしたいの？

私には分からない。第一印象は大事だと思うけど、話している内にそのメッキははがれる。はがれたくないなら、話さないかメッキをつけないか。

私は心を重視する。外見や他人の目ばかり気にしてる人は嫌いだ。

そのままの自分を表現してる人が好きだ。

話がずれちゃったね。元に戻します。

まずケータイを開き、今日の運勢をしてみる。私はこういう占い事が好きで、毎朝起きて確かめている。

まずケータイの占いの結果は………うん！やった！一位！えっと、『理想の人が急に現れる』か………。『理想の人』ねえ。

次にタロット占い。

やった人は分かると思うけど、やり方が難しいので神経をかなり使うけど、結果が沢山あるから楽しみなんだよね！

よし、これだ！……………うん、『運命の輪』か。タイミングをはずさない様にしないと。

（タロット占いを知らない人はごめんね。）

最後にテレビの占い。私は居間に行き、テレビの占いを見た。

『さて、今日一番ラッキーな星座は……………CMの後で！』

……………毎回毎回思うけど、この手のCMムツとくるんだよね。視聴率なんかのために視聴者をわずらわせるだから。こんなこととしてまで数字（視聴率）をとりたいの？

そして一分後。

瞳の機嫌は治っていた。理由はやはり今日一番のラッキー星座だったからだ。

うん、今日はいいい日になるかも！でも『出会いの予感。出会うまで慌てないこと。』ってことで、今日の占いは恋愛要素ばかりね。初

めてじゃ無いのかな？でも、『あの虹』をみるまでは信じられないな。あれが私の中では最重要占いだし。でも、ラッキーアイテムなどは出来るだけ着けるけどね！

そして数分後。哀歌の部屋からラジオ体操第一が流れてきた。

そろそろ哀歌が起きてくるころね。それじゃご飯にしよう！

哀歌が今流行のヘアースタイルにしようとしていた。私は何も知らない振りをして少し馬鹿にしたら、哀歌が馬鹿にした様な目付きで見ていた。

『知らないの？』

って感じで。私もそれぐらいは知ってる。それでも女の子なんだから。ずっとショートカットでイイの。

「行つてきまーす。」と言い外出ると、私の目の前には雲一つない空があった。しばらく見ていると、私はハッとして太陽を見た。

うれしい。今日は忘れられない日になるんだ……。それに理想

の人との出会い。でも、タイミングが大事。焦ってもいけない。占いに通りにすればイイのよ。キット上手くいくよね！

だが瞳は知らない。哀歌がその時、どんな目で見ていて、どんなことを決心したのかを。

時は学校

瞳は出会いを待っていた。学校に着いてからは全てのことに余裕を持って行動していた。移動の時も、黒板の書き取りも。だが、出会いなんてものはなく、逆に理科の抜き打ちテストに不合格になり、昼休み再テストを受けるはめになった。

そして時は昼休み……………。

さすが、高校の抜き打ちテストね。難しいわね。予習復習ちゃんとしなきゃね。わたしは落ちこぼれなんかになりたくないし。などと私が考えながら廊下を曲がろうとしたら急に目の前に人が現れてぶつかってしまった。

「わっ!!」

「きゃ!!」

今思うとなんて偶然なんだと思うけど、出会ってこんなものなのよ。

目の前には男の子がいる。まるで女の子の様な男の子。髪がサラサラで長いのはキメているんじゃないかと、仕方なくそうなってる。前髪で目が半分隠れている。顔は可愛い。これが、私なりの第一印象。

そしてあわててあやまってきた。仕草にわざとらしさが無い。

会話も少しした。明るく素直な喋り方。

一緒に笑った。楽しくなる笑顔。

そして、急いで理科室に入ってしまった。

私は占い通りに理想の人と出会った。

第十四話　虹の効力　早野瞳編（後書き）

フランス語で『はい』は『ウイ』だそうです

第十五話　虹の効力　美琴編　後編

（無事遅れずに理科室に到着したけど、理科って授業つまんない。なにか面白いものないかな）

などと進学校生徒にあるまじきことを考えている美琴があたりを見回していると、床の上に折り鶴を見つけた。

（そうだ！ボクも折り鶴を織ろう！）

そして過ぎていった理科の授業。

時は休み時間

「美琴！家に帰らずに直にオレン家に来いよ！」

「わかったよ。祐二君！でもお菓子買いに町の商店街によらない？」学校の近くに商店街があるんだよね。なんとそこはとても大きくてなんでもあるんだよね。ゲームセンターも有るし、八百屋、本屋、音楽教室、カメラ屋など無いものはない！みたいな感じ。

駄菓子屋ももちろんある。なんと似顔絵屋なんてものもある！ビックリだよ。

「その必要ねえよ。菓子ぐらい家にあるからさ。」

「あ、な〜んだ。なら行かなくていいね。」

「そういうこと！んじゃラスト授業頑張ろうぜ。」

と言って祐二は自分の席に戻っていった。

（う〜ん、久しぶりによつていきたかつたんだけどな〜。まあ、別にいいか。）と言って、美琴はまた折り鶴をつくりはじめた。

そして一日の授業が終わり、祐二と遊ぶ約束をしていた美琴は約束通りに家に遊びにいったのだが……………

「ねえ祐二君。ここ、祐二君の家だよな。」

「ああそうだけど、やっぱり驚くよな。」

「豪邸だよ？驚かないほうがボクは驚くよ……………」

そう、祐二の家は豪邸だ。美琴の家と比べられないほどの豪邸である。どの様なものは想像していただきたい。

「まあ上がって！オレの部屋でゲームとかしたり、話をしようぜ。」

「邪魔します……………」

（あいやゝ。祐二君ってお金持ちなんだな。通りで完璧超人な訳だよ……………って違うかな？きつと、祐二君の部屋までだいぶ時間かかるんだろうな）

だが、美琴の思惑に反して数分でついた。後に祐二に聞いてみると「なんで、オレが部屋に行くまでに時間をかけなきゃいけないんだよ。デカイのは好きだが時間を無駄にしたくないな。」

だそうだ。

美琴は祐二の部屋で一番初めに目に付いたものは、飾られているトロフィーと表彰状だった。しかも、そのほとんどが祐二の中学生時代の部活のものだった。

「すごい！祐二くん！こんなに中学時代活躍したんだ！」

「まあな。でも飽きっぽくさ、県大会出場でその部活辞めてんだ。」

「えー！もつたいない！」

「なんか冷めちまうんだよな。なんかこう燃えたいんだけど、楽々勝ってしまうからテンション下がるんだよな。」

そう言っている祐二の顔には自信に満ち溢れていた。

「でも夏の大会も出場で、その半年後の新人戦でまた出場って呆れちゃうよ。ボクなんて……………」

「ま、まあいろいろあるからな。気にすんなって！それよりゲームしようぜ！これ、昨日発売されたゲームなんだけど……………」

祐二はその時、美琴が落ち込んでいる理由は努力したのにいけなかったと思っていたのだが、それだけでは無かった。美琴が落ち込んでいた理由は……………まだまだ謎にしておこう。

その後、美琴と祐二はずっとゲームをしていた。そして、一時間たつと、祐二がトイレに行くと行って部屋を出ていった。美琴は、部屋の中にトイレぐらないのかな？と思ったが深く考えないことにした。

祐二がトイレに行っている間、美琴はゲームを一人でするのも嫌だと思い、祐二のトロフィーを見ることにした。

（すごいな。剣道個人戦一位、水泳個人戦一位、卓球シングル一位、柔道個人戦一位。一位ばかりだ…。本当に神様は人間を平等に作っているのかな？）

こればかりは神様を恨んでしまうのは仕方ない。そして、祐二の栄光を眺めていると、美琴は共通点を見つけた。そ

れは……

「あ、美琴。ゲーム待っててくれたのか？」

祐二がトイレから戻って来た

「あ、うん。」

「悪いな。んじゃ続き始めるか。」

「それより祐二君。なんでこのトロフィーとかは個人戦しか無いの？」

「？なんでって、理由聞きたい？」

「うん。」

祐二が言った理由を簡単に説明すると、ただ単に足を引っ張られたくないからだそうだ。

「ねえ祐二君。仲間を信じられなかったの？」

「信じられなかったわけじゃない。仲間が、オレが負けてしまう要素になるかもしれないからだ。でも仲間とは仲良かったぜ。オレ一人飛び抜けていたけど。」

祐二は得意そうに言っていた。だが、美琴が呟いた

「ボクとは違うんだ。」というセリフには気が付かなかった。しかし、美琴はすぐに元に戻り、あるいい考えを思い付き、祐二に言った。

「なら、ソフトテニス部に入らない？」

突然の勧誘だった。祐二は驚いた。訳が分からなかったのだ。

「どうしたらそうなるんだ？」

「祐二君はチームプレイみたいなのをやったことないんでしょ？ソフトテニスは二人でやるものだから始めたら？」

「だから、おことわりだつて。チームプレイとかめんどいし。」

「ボクがペアになればいいじゃない！ボクがペアなら大丈夫でしょ？」

美琴の目は本気だった。祐二もその気持ちが伝わったのか、少し考えて結論をだした。

「やつぱり、ダメ。と言うつもりだったけど、高校一番最初の友達だもん！わかった、入部するぜ！」

「本当？やったー！」その後、美琴はずっと狂喜乱舞していた。またしばらくゲームをして祐二の家を出た。

そして美琴の家。それでも、美琴の顔は笑顔だった。

美琴はすぐにご飯を食べ、風呂に入り、自分の部屋に入った。すると姉が意地悪そうな顔付きで部屋に入ってきた。

「どうしたのかな？美琴くん。顔がにやけているみたいだけど。そいえば、今日は太陽の周りに虹が出来ていたらしいじゃない。」

「あ！お姉ちゃん！お姉ちゃんの言う通りになったよ！今日は忘れられない日になりそうだよ！」

「そっか。美琴にもやっと彼女が出来たんだな」

「違うよ！新しい仲間が出来たんだよ！」

そう美琴が言うと、姉はつまらなさそうな顔付きになり

「なんだ、そんなことか。私は彼女が出来たんだと思ったんだけどな。」

と言った出ていった。

姉が出ていった後、美琴は刹那に電話しようとしたが、明日ビックリさせようと思い、電話するのを止め、布団に入った。そして、今日のことを振り返った。

（今日は密度の高い日だったな。部長の言う通り部員も獲得したし、折り鶴も上達したな。そういえば、今日、女の子とぶつかったっけ。痛かったけど、あの女の子、可愛かったな。ショートカットでさ。）

美琴はいつのまにか、女の子のことばかりを考えていた。

（もしかして、あの女の子の出会いも虹の効力だったのかな？そうだったらいいな。お姉ちゃんが言ったこと、現実になっちゃうのかな。）

そう思いながら過ぎていった、美琴の密度の高い日。

第十五話 虹の効力 美琴編 後編（後書き）

グラシアス！

第十六話　く????の考え

『ねえ！ソフトテニス部に入らない？』

今日の昼休みにたずねられた言葉だった。その時は断わった。

『人数が少ないから廃部寸前だろ？それはちょっと……。』

正直な気持ちはどうだったんだろうか。

中学の時は部活に入らずに過ごしてきた。

小遣いを使ってまでスポーツを極めようとは思わなかった。

友達と遊ぶ時に使ったり、ゲームのために使った方がいいと思った。友達と一緒にいるときが楽しかった。だけど、その友達とは受験により離れてしまった。会おうと思えば会えるのだが、機会が減ったのは確かだ。新しい友達をつくらなければならぬ。まずは、話しかけるのが一番なのだが、話題が無いので途切れるのがオチだ。どうすればいいんだ、と思っていると話し声が聞こえてきた。

『なあ、・・君だっけ？お前はなに部に入るんだ？』

『ん、美術部かな。中学の時もだったし、商店街で似顔絵屋やってるから。』

俺が思うに、こいつらは初対面だ。なんとなく話し方がぎこちない気がする。だけど、こいつらは早くも友達になったみたいだった。やっぱり、初対面のヤツと話すには部活のことがいいのか？まあ、

勉強のこととかよりはいいだろう。でも、高校でも部活に入る気はなかった。理由はさっき言った通り。

だけど、部活に入ると友達が出来るとなら入部しても悪くはない。あるていど友達が出来て、遊びグループが出来れば退部すればいい。よし、決まりだ。

中学の時と違って、なんか友達作りにくい。なんで？

どの部活に入ったら話題になるか。文化系はパスだな。辞めにくいし。

かといって、野球とかサッカーは、練習がきついただろう。それに、話題性もないし。

マイナーな部活に入るか。今年から硬式テニス部が出来たからそこにするか？

たくさん入部しそうだから、友達いっぱい出来そうだな。テニスでもするか？ かつこよさそうだし……

『ねえ！ソフトテニス部に入んない？』

急に、昼休み聞いたセリフを思いだした。

たしか、廃部寸前とか何とかいって断わったっけな。

『ねえ！ソフトテニス部に入んない？』

廃部寸前か・・・それもいいんじゃないのか？かなりの話題性だし。人数が少なくて、ダラダラ出来るかもしれない。

『ねえ！ソフトテニス部に入んない？』

それに、勧誘してきたヤツはなんかすぐ友達になれそうだ。

テニスじゃなく、ソフトテニスにするか。中学の時、ギヤーギヤー騒ぎながらやったことがあるていんだけど、けっこう楽しかった。やるなら、やっぱり楽しいほうがいいはずだ。めんどくさいけど、ソフトテニス部に入部しよう。そして、話しの中心になってやる！それじゃ、近々いつてみるか。

もしかしたら、オレ、超天才で誰よりも上手くなったらどうしよう。辞めにくくなる・・・なうんてね。そんなことはないよな。

早く友達を作って、話したり、遊んだりしたいぜ。

「ねえ、・・・君は美術部に入るんだよね。楽しい？」

「楽しいぜ。なんか。それより君はなに部？」

「あつ、オレ？オレはソフトテニス部だよ。あの潰れそうな！」

第十七話　く成立と運命？く

「ホラ、刹那！新人部員だよ」

美琴が得意満面で来た。

確かに新人部員みたいだ。服も着替えてラケットも持っている。

「祐二君っていつてね、スゴイんだよ。スポーツ万能でさ沢山賞状持っているだよ！」

「それは凄いな。ソフトテニス部だったのか？」

俺は交友を深めるため出来るだけ沢山話そうとしている。まずは会話ってね。

「いや、硬式のならあるが……ソフトテニスは初めてだ。けど大丈夫だって。俺、なんでも出来るから」
自信満々で答える祐二。

まあ、いいんじゃない？自信あったほうがいいにきまつてるし。

「それに、硬式でやってたから大体はわかるよ」

「そうか、そりゃ頼もしい！俺より上手くなってくれよ。そして一緒に県大会に目指そうぜ！」

「足ひっぱんなよ」

凄いな、会ったばかりのヤツに軽口を言うなんて。

俺がそう思っていると、美琴が

「ちよつと祐二君を指導してくるね！」

美琴の顔がひきつっている。

「俺も手伝おうか？」

「い、いやいいよ。刹那はサーブの練習でもしていて」
そう言つて、コートの隅に祐二を連れていった。

疑問に思いながらも一人黙々とサーブ練習を行った。

なんか寂しいよな。

先輩達は課外で忙しいし、美琴は教えにいったし。どうしようか。

「ちよつと祐二君！なんてこと言うの？刹那怒ったらどうする？」
美琴が俺に忠告してきた。別に怖くはないのだが。

「いや、ホントごめん。癖でつい」

「ソフトテニスはチームワークが大切なんだから気を付けてね」

「はい」

まあ、あれ位で怒ったならそこまでの男だ。なかなかのヤツだな。
刹那ってヤツ。

打つのをみると硬式と違ってサーブが遅い。後で美琴に聞くと、そんなもんだ、だそうだ。

驚いたことは、セカンドがしたからだったことだ。あんなの硬式でやったらすぐにうちこまれるだけなのに。

それも、美琴に聞くと、前衛を信頼してるからだよ、だそうだ。

もし、あいつがペアだったら信頼できるのかな。

籠に入っていたありったけのボールをすべて打ってしまいボール集めを始めた俺。

六割位か……入ったのは。

そう思いながら玉集めをしていると哀歌がよってきた。

「刹那くん！」

「なんだ？」

「なんだとはご挨拶ねえ。ま、いいや。それより、あの入口に立っている男の子、入部希望者じゃないの？誘ってみたら？」

確かに、男が立っている。希望者かもしれない。誘ってみる価値はありそうだ。

「サンキュ哀歌。それよりお前、ソフトテニス続けるのか？」

「まあね。ちょっと迷っただけど、一度始めたものだから続けよ

うかと。瞳もだよ。今日は来てないけど」

哀歌は不思議がっていたが俺が気にすることではない。

「そっか。んじゃ、俺は勧誘しに行くから」

「あ、頑張つてね」

そう言つて謎の人物の元にいった。

「もしかしてソフトテニス部に入るの」

謎の人物に話し掛けた。違ったら恥ずかしいよな、こういうセリフ
つて。

「あ、はい」

緊張しているみたいだ。それに敬語だ。俺のこと、二年生と思つて
いるみたいだ。

「ああ、俺一年だから。よろしく」

「そっか。つか俺、初めてなんだけど……」

「大丈夫だつて。他に素人が入ってきてるから。」

そう言つて、コートの中に入ってきた。

良かった。これで四人。ちょうど二ペア出来る。あと二ペア欲しい

が贅沢は言えない。

この仲間で県大会を目指そう！

「あ、俺、渚刹那。そっちは？」

「俺は佐倉和人」

「和人君、せめて、体操服で来たら嬉しかったなあ」

「ごめんな」

コミュニケーションばっちし。友達になれたはずだ。

その頃

「あゝ！あの男の子、ソフトテニス部に入ってる！これってやっぱり運命かなあ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2312b/>

オレ達のソフトテニス部

2010年11月16日03時31分発行